自己満ゼロ魔転生一人称（つもり）小説（中2病注意）

シャナ・ヴァリエール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自己満ゼロ魔転（つもり）生一人称小説（中２病注意）

【Ｎコード】
Ｎ６３２５Ｐ

【作者名】
シャナ・ヴァリエール

【あらすじ】
とある学生が人生で始めて書いた作品です。
文章とかもマジで拙いですが、生暖かい目で見てやって下さい。
おかしな描写とか誤字脱字もかなりあるんで（自覚あり）、お知らせください。修正します＾＾；

第1話　転生！？（前書き）

学生です。自重しません。文句があったら中傷にならない程度でお願いします。基本的に自己満です。処女作ですし、そもそも文を書くこと自体が始めてです。下手なので色々と教えて下さい。

第1話　転生！？

目を開けると、上には2つの顔があった――――

ようやく飲み込めてきた。自分は、どうやら「転生」してしまったらしい。

どこの国だろう？少なくとも、ヨーロッパであることは確実でしょう。

それは、天井にあるシャンデリアや両親の顔立ちから分かります。

しかし、よかったなぁ。この両親、とってもいい人なようです。声を掛けようと思ったけど、「オギャア」しか言えません。そういえば、まだ赤ん坊でした。他にすることがなく暇なので、周囲を見渡してみます。なんというか、すごい豪華です。世界史の教科書で見たヴェルサイユ宮殿とよく似ています。

突然、父らしき人物が口を開いた。

「アメリー、名前はどうする？」

それに母らしき女性が答える。

「うーん・・・じゃあ、エドアールでいいかしら？」

そうか、母の名前はアメリーというのか。

「おお、いい名だ！じゃあ、エドアール、よろしく頼むぞ」

そういって抱きかかえられた。なんというか、複雑な心境です。そりゃそうでしょう、昨日まで高校生ライフを満喫してたんですから。まさか、こうも早死にするとは思いませんでした。

――5年がたった。この間に分かった一番大きなこと、それはこの世界が「ゼロの使い魔」の中の世界だということです。幸い、１９巻―（当時）までの原作知識はあります。そのことが分かったのは３歳のときですから、今はひたすら魔法の本や筋トレなどをしています。なにしろ、そうしないとやがて訪れるであろう大戦争を生き残れませんからね。

他にも分かったことは色々あります。

・僕が生まれたのは「ガストン家」という侯爵家。財政は赤字気味。

・父は風のスクウェア、母は水のトライアングルだ。そこそこエリートな両親ということだろう。

・ガストン家はラ・ヴァリエール家と関係が深い。今度連れて行ってくれるそうだ。ついでに、父に言われた。

「ラ・ヴァリエール家にはお前より1歳年下の女の子と、年上のお姉さんが2人いるからな。仲良くしえもらえ」

そして、ついに杖契約のときがやってきた。とても緊張しましたが、難なく終わったようでよかったです。そのことを父に報告すると、

「おお、もう終わったのか！さすがは私の息子ということか、ワッハッハ。しかし、思っていたよりも早かったな。もう少し時間がかかると思って、コモンマジックの先生は明日から来ることになっているんだ。すまんな。」

といって、また笑っていました。することがないので、結局その日は魔法についての本を読んで終わりました。

次の日、父が３０歳目前ぐらいの男性を連れてきた。

「エド、こちらがお前の先生のローラン・ディアンス先生だ。まだ若いけど、教師としての実力は折り紙つきだ。なんせ、私の先生の息子だからな。」

「ローラン先生、よろしくお願いします。」

「エドアール君、こちらこそよろしく」

それから、魔法の練習が始まった。どうやら、僕はものすごく上手いらしい。半年後に全てのコモンマジックを覚え終わった。

「いやぁ、エドアール君はすごいなぁ。たった半年で全てのコモンマジックを覚えるなんて。もしかしたら、王国一の逸材かもね。では、早速ガストン侯爵に報告してくるよ。」

と言って、ローラン先生は微笑みながら父のところへ行った。すぐに、父と一緒に現れる。

「エド！お前、もうコモンマジックを覚えたのか。これはすごいな。では、１週間後から系統魔法の練習をしようか。最後に、ローラン先生に感謝の挨拶をしておきなさい。」

「え？ローラン先生は系統魔法を教えて下さらないのですか？」

「エドアール君、僕はまだラインなんだ。ガストン侯爵家の系統魔法の教師としては、足りないんだ。」

ローラン先生は苦笑しながら言った。父も苦笑しながら言う。

「別に私は申し分ないと思うのだが、世間の目というものがあるからな。」

正直、慣れたローラン先生に教えて欲しかったのだけどね。まぁ、仕方がない。

「そうですか・・・。ではローラン先生、ありがとうございました。」

「じゃあエドアール君、君も頑張ってくれよ。」

そう言って先生は名残惜しそうに屋敷から出て行った。

系統魔法の先生たちが来るまで、ずっとコモンマジックをしていると、父が話しかけてきた。

「1段落ついたことだし、前から言っていたラ・ヴァリエール家に遊びに行かないか？」

やった、前から行きたかったんだよね。ルイズとも会ってみたかったし。そんな気持ちを抑えて一応聞いてみる。

「でも父上、本当にいいのですか？」

「当たり前だろ。ちゃんとラ・ヴァリエール家にも使者を出している。1時間後には出発するぞ」

これは嬉しいです。初めてルイズと会うので、挨拶をして良好な関

係を築いておきたいですし。

しかし、ラ・ヴァリエール家は非常に大きい！うちもかなり大きいと思っていましたが、そんな我が家の3倍以上はあります。さすがはトリステイン最大の貴族のお屋敷だ。

ガストン侯爵家の人間なのですぐに奥に通されます。そこには、すごい威圧感を漂わせる壮年の男性。身に纏ってるオーラからして、この人がヴァリエール公爵でしょう。

「お久しぶりだガストン侯爵、そして始めまして。エドアール君。」

「お久しぶりですヴァリエール公爵。」

「始めまして、よろしくお願いします。」

ふう、とても緊張します。

「エドアール君、早速だが娘たちに会ってくれないか？年齢も近いし、会っておいて損はないだろう。」

「ありがとうございます。」

そう言ってヴァリエール公爵が呼んだメイドについていくと、大きな客間に連れていかれました。

そこいたのはもちろん3姉妹。改めてこうやって見ると、本当に美少女揃いです。あの金髪はエレオノールさん、どこか儚げで弱々しいのはカトレアさん、桃色の髪の小さいのがルイズですね。考えておいた自己紹介の文、ちゃんと言えるか心配です。

「始めまして。ガストン侯爵の長男、エドアール・フォン・フェリックス・ガストンです。エドと呼んで下さい。これからお世話になることが多々あると思いますので、よろしくお願いします。」

ちゃんと言えました。５歳児にしてはいい自己紹介でしょう。

あちらは年齢順に挨拶をするようです。

「こちらこそ始めまして。私はエレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールです。姉と思って下さい。」

やはりなんかキレがありますね。笑顔もキツい感じです。

「始めまして。カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌです。よろしくね～。」

カトレアさんはまだ病気は酷くなってないようです。しかし、なんかおっとりしてますね。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。長いからルイズでいいわ。よろしくね。」

まぁ大体想像通りの挨拶です。この日はルイズのお姫様ごっこに付き合わされて終わりました。どうやら、ルイズは僕のことを気に入ってくれたようです。すぐに「エド兄様」と呼んでくれるようになりました。

家に帰ると、父から聞かれました。

「ラ・ヴァリエール家はどうだった？」

「とても大きくて、さすが一国の最大の貴族だと思います。」

正直な感想です。

「そうか、それはよかった。」

父はそう言ってニコニコしています。何が嬉しかったんでしょうか？そんなことを聞く間もなく、父は書斎へと入っていってしまいました。このことは今度でいいでしょう。

そして、明後日からは系統魔法の勉強が始まります。今日明日はゆっくり休んで、それに備えましょう。

第1話　転生！？（後書き）

誤字脱字、おかしな描写等大歓迎です

2話　系統魔法（前書き）

調子に乗って2話の書きました。
厨房乙丸出しな作品ですが、よろしくお願いします。
ちなみに、この作品に出てくるオリキャラはほとんど実在の人物です。

2話　系統魔法

今日から系統魔法の勉強が始まりました。
風は父上、水は母上、土はジャック・ティボー先生、火はパトリス・マクマオン先生です。

初日は、ティボー先生の錬金の授業です。
ティボー先生は石を持ってきて机の上に置きました。

「よーく見ててね。・・・それ！」

瞬きをした一瞬の間に、石は鉄に変わっていました。
そして、ティーボ先生は再び石を置きました。どうやら、僕にやらせるそうです。よく分かりませんが、錬金とは恐らく化学変化のようなものでしょう。メンデレーエフの元素周期表や有名な分子の化学反応式は一応覚えています。

「それではエドアール君、手始めにこれを青銅に変えてみてくれ。」

青銅は銅と錫の化合物だったはずです。それをイメージしてやってみました。

「おお、すごいぞエドアール君！一発で成功だ！ん・・・しかも、純度も９０％を超えているな。もっと練習すれば１００％近い数字も夢ではないかもしれん。」

よかった、どうやら成功したようです。しかもかなりの純度で。もしかしたら土の才能があるのかもしれません。

「一発でこの純度の青銅を作れるなら、今日はもうちょっと進もう。鉄を錬金してみてくれ。」

そういってまた石を置きました。鉄は酸化鉄を還元して作られていたはずです。恐らく、この石にもある程度の酸化鉄が含まれているはずなので、その酸化鉄から酸素を取り出すイメージでやってみました。

「うわ、鉄も一発で成功したぞ！まぁ、少し小さいが訓練を積めばもっと大きいのが出来るだろう。まぁ、欲張りすぎるのはよくないので、今日はここまで。ちゃんと復習しておきなさい」

ティボー先生はどうやら嬉しそうです。もちろん僕も嬉しいです。

その後、父上の部屋の前を通ったら話し声が聞こえました。

「ガストン侯爵、ご子息は土が得意なようです。たった今日1日で９０％以上の純度の青銅と鉄の錬金に成功しました。」

「何ッ！？それはまことか？」

「はい。」

「そうかそうか。それも教師が優秀だからかもしれんな。」

といってワッハッハと笑います。どうやら、かなり上機嫌なようです。

そして、ティボー先生の

「では、これにて。」

という言葉が聞こえたので、走って部屋に戻りました。
錬金は、あちらの世界の知識を使えばとても簡単です。
錬金を授業の復習をして、今日はもう寝ました。

次の日、今日は母上による水の授業です。

「いい、エド。水は戦闘には向いてないけど、困っている人を助けたり味方の援護に非常に役に立つのよ。」

どうやら、僕の得意系統は土と水なようです。この日も、母上を驚かせるほど上達しました。
（ちなみに、擦り傷ぐらいは治せるようになりました）

「さすが私の子ね。」

と母上は上機嫌です。しかし、得意な系統というのはたいてい１つか２つ。要するに、火と風という戦闘向けの魔法は不得手ではないのか？と考えて少し心配になりました。明日は虚無の曜日、つまり休みなので今まで通り体力作りをして、剣術の練習をしましょう。

ふぅ、気持ちのいい朝です。快晴ではなく若干曇っているので、気温も丁度よく、走りこみが楽でした。どうやら、毎日続けていることもあり、屋敷内に僕の体力と剣術に勝てる人はもういないようです。この調子で鍛錬して、杖がなくても戦えるようになりたいです。
今日は疲れていたのでよく眠れました。

今日は朝からちょっと憂鬱です。なぜなら恐らく苦手であろう風、そして先生は父上だからです。父上を幻滅させることだけだしたくないので、一生懸命やりました。なんと意外なことに、
「お前は風が上手い。スクウェアになることも容易だろう。」
とのことです。よかった、戦闘向きの系統も使えて。父上も非常に喜んでいます。
そして、父上からすごいことを聞きました。

「お前、弟が出来たらどうする？」

これ、なんというか、あれですよね。絶対母さん妊娠してるパターンですよね。
もちろんこう答えます。

「可愛がります。」
と。

父上「そうか。」と言って、満足げに部屋に戻っていきました。

今日は火の授業の日です。

「マクマオン先生、よろしくお願いします。」

「エドアール君、こちらこそ宜しく」

マクマオン先生の授業を受けて自分でも驚きました。

「トライアングルは確実。」

だそうです。
これはやっぱ、すごいことなんでしょう。父上も椅子から滑り落ちるぐらい（というか実際に落ちていました）驚いています。
これで実質僕は４系統全ての使い手、しかも努力しだいで全てスクウェアです。
そうなれば、虚無にも対抗できるかもしれません。

１回も言ってませんが、僕の夢は

「ハルケギニアの平和と自分が最強になること」だからです。

せっかく転生できたのですから、少しぐらい大きな夢が見たかったんですよ。

では、疲れたので今日は寝ることにします。

2話　系統魔法（後書き）

誤字脱字、おかしな表現の指摘は大歓迎です。
最後の「では、疲れた～」の描写は筆者のことではありませんよ＾＾

一応、話の最後は寝る、もしくは次回に含みを持たせる感じで終わらせようと思ってますのでｗ

3話　領地経営をしてみる（前書き）

なんかｇｄｇｄしてすいません。
書き始めたばかりなので気合はいってますが、そのうち更新ペースは３～４日に１回になると思います。

3話　領地経営をしてみる

初めて系統魔法を習ったあの日から5年が立ちました。
魔法の腕はどうかと言うと、火はライン、風トライアングル、土ライン、水トライアングルです。いい感じですね。
そして、僕の年齢もついに2桁です。
しかし、いまだにガストン領の赤字経営は続いています。
今まであまり領地に出て交流してなかったので、視察も兼ねて領地を一回りしてみることにしました。

すると、驚くべき発見がありました。
空き地がたくさんあるにも関わらず、農民たちは今ある細々とした農地だけで農耕をしていたのです。
これは大問題です。
早速、父に進言してみました。

「父上、農民たちは今ある狭い農地だけで農耕をしています。せっかく空き地がたくさんあるのだから、開墾して、もっと生産量を増やすべきではないのですか？」

すると、父はため息交じりに口を開きました。

「そうしたいのはやまやまなんだが、我が家にはもはやそれを行うほどの財力もない。はて、どうするかなぁ・・・」

それなら話は簡単です。

「それでは父上、我が家には必要以上に家臣がいます。そのうちの何割かをそっち方面にまわしたらどうでしょうか？」

なんでこんな簡単な方法を思いつかなかったんでしょうか。
やはり、メイジとしてのプライドなんでしょうね。その点、僕は前世が前世なので抵抗感は全くありません。
父上の答えもやはりそうでした。

「エド、それも考えたんだが、メイジがそのように力仕事をするのはなんだか嫌みたいなんだ。実際、私も苦手でね。」

それなら、自分1人でやるしかありません。
その旨を父に伝えると、相当驚いたようでしたが許可してくれました。

「お前が率先してやれば、家臣たちも参加するだろう。」
と。

しかし、いくらなんでも1人でするのはやはり厳しいので、領内の特に農地が少ない農民を集めて話しました。

「もっと農地が欲しくありませんか？今の2～3倍は堅いですよ。欲しい人だけ残っておいて下さい。」

予想通り、誰も帰る人はいませんでした。
そこで、領内の地図を広げます。

「ここと、ここ、それからここに大きな空き地があるの、分かりますね？僕は、そこを開墾して農地にしようと考えてます。それに協力してくれませんか？もちろん、開墾が終わるまでは税は免除します。」

よかった、全員協力してくれるみたいです。

ということで、翌日から早速開墾作業が始まりました。
とはいっても、この空き地は道すら通っていないので、まずは道路建設からです。
農民たちが雑草を抜き、土を盛って固めて、最後に僕が固定化をかけます。
この作業、思っていたよりも大変でしたが2日で終わりました。
ですが、こんなのまだまだ序の口です。

今日からは本格的な開墾作業に入りました。
ここでは僕の出番は家を建てる手伝いと亜人たちの撃退です。
非常に大変でしたが、なんとか作り終えたようです。

1ヶ月もすると、立派な農地が出来上がりました。
どのぐらい大きいかというと、ヴァリエール家の屋敷と同じくらいです。
ここには、約半数の農民が移住することになりました。
将来的には、ここだけでガストン領の4分の1程度を生産するようになるでしょう。

しかし、まだまだ休むことは出来ません。
まだ、ここと同程度の大きさの空き地が1つ、ここの半分ぐらいの大きさの空き地が残っています。
ここで僕は1つ考えました。

「自分1人では大変だから、平民メイジを登用してやらせてみたらどうだろう？」

大正解だったようです。

ためしに3人ほど（全員土のライン以上の実力です）雇ってみましたが、グッと楽になり、作業効率も格段に上がりました。
もはや僕の仕事は指示を出すことぐらいです。
この空き地、大きさは前の空き地と同じぐらいでしたが、３週間で出来上がりました。約一週間の短縮に成功です。

最後の空き地はそこまで大きくないため、１０日程度で終わりました。

収穫高はどれくらいかな？
来年が気になりますね。

そういえばまた閃いたのですが、平民メイジたち、もっと別の方向にも使えるのではないでしょうか？
来年以降の収穫高次第ですが、大きく黒字になるようであれば平民メイジたちを雇って、私設軍（平時は内政や治安維持に使用）を作ろうと思います。
ガストン領は侯爵のなかでもかなり兵が少なく、しかも世襲制のためみんなやる気がありません。こちらの軍の改革も一応進めてみますが、とりあえずの私設軍です。将来的には、来る大戦争にもちゃんと戦える軍を作りたいです。

畑仕事をして疲れました。
もう寝ることにします。

3話　領地経営をしてみる（後書き）

誤字脱字等の指摘、大歓迎です。

しかし、短いですねぇ。

僕は短い作品を2～3日に1回のペースで更新を続けて生きたいと思います。

登場人物紹介（オリキャラ限定）（前書き）

これ書かないと、自分が登場人物の名前を忘れてしまいますｗｗ
主人公の名前も忘れましたしｗｗｗ

登場人物紹介（オリキャラ限定）

☆エドアール・フォン・フェリックス・ガストン
　ガストン侯爵家（↑この名前、マリスさんの小説の登場人物と被ってしまいました。ごめんなさい）の長男。前世はそこそこ頭のいい大学生（東京外〇語大学）。メイジとしては非常に優秀。内政力は平均ちょい上ぐらい。外交と軍事の能力に長ける。碧色の髪と瞳を持ち、非常に整った顔立ちをしているが、前世ではそういうことに縁がなかったため、そのことには気づいていない。また、女性に関することは基本的に鈍い。こっそりハルケギニア最強を目指している。

☆ローラン・ディアンス
　エドのコモンマジックの先生。エドのお父さんのコモンマジックの先生の子供。でも、系統魔法はド下手。

☆ジャック・ティボー
　エドの土系統の先生。トライアングル。錬金はちょっと苦手。

☆パトリス・マクマオン
　エドの火系統の先生。スクウェア。特筆すべきことはない。

☆アメリー
　エドのお母さん。本名は不明（秘密にしている）。水のトライアングル。治癒魔法が上手。妊娠していたが、流産したためガストン家ではそのことに触れるのはタブーとなっている。

☆父
　エドのお父さん。侯爵。こちらも本名は作中では明かされない（

エドは知っている）。風のスクウェア。

登場人物紹介（オリキャラ限定）（後書き）

gdgdなのが目に見えてますねwww
エドの両親の名前がないのは、決めてなかっただけです。
これからもときどき、人物紹介を入れようと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6325p/

自己満ゼロ魔転生一人称（つもり）小説（中2病注意）

2010年12月25日23時56分発行